

# ミリオンダラー・ベイビー

2005(平成17)年5月31日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督・製作・主演＝クリント・イーストウッド／出演＝ヒラリー・スワンク／モーガン・フリーマン／アンソニー・マッキー／ジェイ・バルチェル／マイク・コルター／ブライアン・F・オバーン／マーゴ・マーティンデイル／ネッド・アイゼンバーグ／ブルース・マクヴィッティ (ムービーアイ、松竹共同配給／2004年アメリカ映画／133分)

……遂に『ミリオンダラー・ベイビー』を観た。大作がひしめく中、37日間で完成したという、このような静かな人間ドラマ(?)が『アビエイター』を押しつけてアカデミー賞の作品賞、監督賞を受賞したことにハリウッドの良心を感じるのには私だけではないだろう。女性ボクサーという異例の主演を見事に演じきったうえ、ラストに至るアッと驚く結末まで観客の集中力を途切れさせない役者の演技力と作品の魅力にビックリ! 75歳のクリント・イーストウッド監督には今後もまだまだ頑張っていて、いい作品をつくり続けてもらいたいものだ。

## 2005年第77回アカデミー賞の明暗

2005年の第77回アカデミー賞は、『アビエイター』が最多11部門にノミネートされ、マーティン・スコセッシ監督と主演のレオナルド・ディカプリオは「今度こそ」と満を持していた。しかし結果は、クリント・イーストウッドが監督・主演した『ミリオンダラー・ベイビー』が作品賞、監督賞、主演女優賞、助演男優賞という主要4部門を受賞し、『アビエイター』は、ケイト・ブランシェットが最優秀助演女優賞を受賞したもののその他は、撮影賞など4部門だけという結果となり、くっきりと明暗を分けた。

このようなアカデミー賞にまつわる生々しいドラマは、新聞・テレビそして『キネマ旬報』をはじめとする映画雑誌で報じられていたが、私は今になってやっと、この『ミリオンダラー・ベイビー』を観ることができた。事前の情報はバ

ツチリ。しかしあまり期待しすぎるとかえって……？ そんな期待と不安の入りまじった気持で映画館に入ったが……？

## 坂和解釈による3部構成論

この映画は、私の解釈によれば3部構成となっている。まず、第1部は自己紹介編で、ボクシングジムを「経営」するフランキー・ダン（クリント・イーストウッド）と、かつてタイトルマッチにも出場した経験のあるスクラップ（モーガン・フリーマン）との信頼関係が描かれる。そしてこの2人と、ダンへの弟子入りを願う女性ボクサー、マギー・フィッツジェラルド（ヒラリー・スワンク）との新たな人間関係が成立するまでのストーリー。

第2部は、師弟関係が成立したダンとマギーとの二人三脚による新たな挑戦とその成功物語。その中でマギーとその家族との確執が描かれ、さらにそれと対比するかのよう、ダンとダンの娘との確執が、抽象的な形ながら明確に描かれる。そんな中、ダンとマギーとの関係は、師弟の関係の他、父娘の愛情にも似た関係となっていくが、成功物語の中ではそれはウラに隠されたまま……？

そして、あっと驚く第3部。これこそクリント・イーストウッド監督が、「これはシンプルなラブストーリー、父と娘のラブストーリーだ」と語るように、この映画の真骨頂。ボクサーとして快進撃を続け、「青い熊」ビリーと100万ドルのファイトマネーをかけたタイトルマッチに挑んだマギーには、あっと驚く結果が待っていた。

この第3部を事前にバラしたのでは、この映画を観る楽しみが失われてしまうので、それは厳禁！ 1人1人がそれぞれに、クリント・イーストウッド監督が描く「父娘像」を味わってもらいたい。

## モ・クシュラとは？

マギーがボクサーとしてメキメキと頭角を現してからラストに至るまで、この映画の「ボクサーの成功物語」と「父娘の愛情物語」に一貫した緊張感をもたらしているのが「モ・クシュラ」という言葉。これは、マギーが英国チャンピオンとの試合に臨んだ際にダンがつけた名前。ボクサーの試合前の「選手入場」(?)

の際に必要な選手用ガウンをマギーにプレゼントしたダンは、その背中に「モ・クシュラ」と刺繍させたのだった。果たして、これはどこの国の言葉？ そしてその意味するものは？ いくらマギーがそれをたずねてもダンは答えない。そして、アイルランド人が多くを占める観客たちは、マギーの見事な闘いぶりに興奮し、「モ・クシュラ」「モ・クシュラ」と叫んでいた。その言葉の意味が明らかになるのは一体いつ……？

## この映画はボクシングドラマではなく、人間ドラマ

ヒラリー・スワンクが女性ボクサーになりきるために想像を絶する努力を重ねたことは、十分理解できる。また、結果的にマギーの重大な人生の転機となったタイトルマッチ戦における、チャンピオンの「青い熊」ビリー役は、現実には4度世界チャンピオンになった、プロの女性ボクサーとのこと。したがって、この映画におけるボクシングの試合の迫力はかなりのもの。しかし、しかし……？

ボクシング映画の名作は数多いが、最も人気の高いのはやっぱり、シルベスター・スタローン主演の『ロッキー』（76年）、『ロッキー 2』（79年）、『ロッキー 3』（82年）、『ロッキー 4 炎の友情』（85年）、『ロッキー 5 最後のドラマ』（90年）だろう。また日本のマンガでは、私が大学生の頃むさぼり読んだ『あしたのジョー』がその代表格。スクリーン上で展開される『ロッキー』でのボクシングの試合は、それを観ているだけで感動を覚えるもの。

それに比べると、この『ミリオンダラー・ベイビー』でのヒラリー・スワンクが演じる女性ボクサーの試合は「屁」みたいなもの……？ と言っては、失礼だが、その迫力はやはり「月とスッポン」……？ しかしそれはそれでいい。なぜなら、この映画の「売り」はボクシングシーンではないから。この映画はボクシングドラマではなく、あくまで人間ドラマなのだ。

## ダンもマギーも寂しがりや……？

この映画が人間ドラマ、父娘ドラマとして最高の出来となったのは、F.X. トゥールの短編集「Rope Burns」（日本語題：「テンカウント」早川書房刊）におさめられた同名の短編をベースにして書き上げられたポール・ハギスの脚本の出来に

よるところが大きい。この映画のパンフレットには何と「イーストウッド小辞典」というものがあり、そこでA級映画とB級映画の区別について、イーストウッドが「A級映画は観客にものを考えさせる。B級映画はすべて説明してしまう」と解説しているが、まさにそのとおり。

この『ミリオンダラー・ベイビー』は観客にものを考えさせる映画の典型で、ダンは何で毎週教会に通っているのか？ なぜいつも娘に手紙を出しているのか？ 娘はなぜ手紙を受け取らないのか？ 娘の名前は？ 娘はどこに？ なぜ父娘の断絶が……？

次から次へと湧いてくるはずの疑問に対してイーストウッド監督は何も答えず、何も示さないまま……。

他方マギーは、自らの口で自らの生い立ちをダンに語る。そしてダンの助言にしたがって、母や妹に家を買ってやったりして最大限の親孝行をしようとするが、これがすべて空回り……。さてその原因は……？ イーストウッド監督はこれについても明確な回答は示さない。このように、とにかくダンもマギーもワケがあることはわかるが、この2人が会えるまでの人生についてはわからないことが多い。唯一わかるのは、ダンもマギーも寂しがりやということ。

人はみんなそれぞれ、大なり小なりの「歴史」を背負って生きていることは当然だが、男と男、男と女を問わず、出会った人間同士がピッタリと「はまる」ことは滅多にないもの。

そうだからこそ、その反面として、そんなにピッタリと「はまる」2人になった時には、大きな感動が生まれるもの。映画監督という仕事はそれをすべて緻密に計算し尽くした上でカメラを回すものだし、一流の役者は自己の役割を100%理解したうえでその役柄を演ずるもの。

そうすると、それがピッタリと「はまった」、この『ミリオンダラー・ベイビー』が感動作となったのは当然……？

## 迫力あふれるヒラリー・スワンクの熱演にビックリ！

私はヒラリー・スワンクが1度目のアカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞した『ボーイズ・ドント・クライ』（99年）を観ていないものの、『マリー・アントワ

ネットの首飾り』(01年)、『シネマルーム1』68頁参照)、『インソムニア』(02年)、『シネマルーム2』197頁参照)、『ザ・コア』(03年)、『シネマルーム3』97頁参照)はすべて観ている。それぞれの映画評論に書いたように、彼女はそれぞれの役柄ですごく魅力的だと感心していた女優。もっとも、「美人女優」というイメージを持っていただけに、この映画でのハングリーなボクサー役というのはまったく意外なものだったが、その迫力あふれるボクサーとしての熱演にはビックリ。さらにダンとの語らいやスクラップとの語らいの中に見せる彼女の演技のすばらしさは絶品！そしてあっと驚く「第3部」でも……？この映画で彼女がアカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞したのは当然だろう。

### 坂和流助演男優賞選びは難航……？

第77回アカデミー賞助演男優賞にノミネートされたのは、『ミリオンダラー・ベイビー』(04年)のモーガン・フリーマンの他、『アビエイター』(04年)のアラン・アルダ、『サイドウェイ』(04年)のトーマス・ヘイデン・チャーチ、『コラテラル』(04年)のジェイミー・フォックス、『クローサー』(04年)のクライヴ・オーウエンの4人。私はこれらの5作品を全部観ている。たしかに、この5人を並べてみると、絶対この人と1人を選ぶのは難しい。

まず、『アビエイター』のアラン・アルダはちょっと影が薄かったし、逆に『コラテラル』のジェイミー・フォックスは主役のトム・クルーズを食っていた感じ。そこで助演男優賞としてふさわしいのは残りの3人だが、これは横一線。そうなると決め手は作品の良し悪しとインパクトの度合い。

その観点から見ると、まず『クローサー』のクライヴ・オーウエンが落ちて、『サイドウェイ』のトーマス・ヘイデン・チャーチと『ミリオンダラー・ベイビー』のモーガン・フリーマンの2人が残る。そのどちらを選ぶかはホントに難しく、私としてはどちらでもオーケー……？

### 第77回アカデミー賞の結果に坂和は納得

第77回アカデミー賞の監督賞と作品賞は『ミリオンダラー・ベイビー』が取ったが、「個人賞」では『Ray / レイ』(04年)のジェイミー・フォックスが最優秀

主演男優賞、『ミリオンダラー・ベイビー』のヒラリー・スワンクが最優秀主演女優賞、『ミリオンダラー・ベイビー』のモーガン・フリーマンが最優秀助演男優賞、『アビエイター』のケイト・ブランシェットが最優秀助演女優賞を取り、微妙なバランスを保つ結果となった。少し『ミリオンダラー・ベイビー』にウエイトが傾いた感はあるものの、これはハリウッドでも大作娯楽作品よりも、やはり映画は人間ドラマ、感動ドラマがいいと思う健全な精神(?)がもたらした結果では……? そういう意味で第77回アカデミー賞の結果に坂和は納得……?

### クリント・イーストウッドは75歳だが……?

クリント・イーストウッドはこの映画で2度目のアカデミー賞最優秀監督賞を受賞したが、1930年生まれの彼は今75歳。そんな年になって映画に主演しかつ監督をするというエネルギーには感服するばかり。マカロニウエスタンと呼ばれて一世を風靡した『荒野の用心棒』(64年)は私の中学、高校時代の映画で懐かしいもの。友人の1人などはいつもその主題曲を口笛で吹いていたものだ。

この映画でのイーストウッドの演技を観ていると、さすがに少し老けているなと思うものの、俳優というものは便利なもので、年相応のいい役柄が与えられればいくらかでもいい演技をすることが可能。

しかし、役者も監督もやはり体力と気力が勝負。クリント・イーストウッドの体力と気力がいつまで続くのかは知らないが、久しぶりに『オペレッタ狸御殿』(05年)を発表し、これが2005年の第58回カンヌ映画祭に特別招待された日本の鈴木清順監督は1923年生まれだから、さらに7年も先輩……?

80歳を超えてなお「昔回帰映画」(?)をつくり、カンヌ映画祭では、ドレスで正装した主演の章子怡チャンツイイーとともにタキシード姿に正装して会場入りするなど大活躍している鈴木清順監督を見れば、クリント・イーストウッドもあと10年はバッチリと活躍してもらいたいものだ。

2005(平成17)年6月1日記